

共立女子大学「文学をひらく04」(学部・短大全学生)授業実践報告

岩田, 久美加
共立女子大学文芸学部 : 非常勤講師

<https://hdl.handle.net/2324/4842528>

出版情報 : オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp.17-17, 2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン :
権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本授業は、和歌と歌謡の違いを認識し、古代歌謡をよむことで、その表現の特徴を知り、和歌では表現されることのない歌謡独自の面白さを知るためのものである。そのためには、実際にどのような場でうたわれたのかなど、披露の環境についても様々な文献資料や映像資料を用いてその諸相を明らかにしていく側面もあった。具体的には、和歌と短歌の違い、また和歌と歌謡の違いをまず確認し、史書である『古事記』『日本書紀』所載の歌謡をよみ、地誌である『風土記』に歌謡がおさめられている意味とその歌謡の表現するところを学び、歌謡から雑歌へとうたが自立していく様相を確認し、律令国家成立期を記述した『続日本紀』の歌謡が担う意味を知り、『催馬楽』の歌謡にふれることを通して、歌謡とは言葉による表現だけでなく、音楽性の重要性を認識するというシラバスであった。成績評価については、後期末試験 60%、小テスト 30%、コメントペーパー等 10%の割合で成績を評価する予定であった。また、シラバス提出時においては、オンライン授業は想定していなかった。なお、学部生だけでなく短期大学生も数名受講した。

後期の授業については、大学からは、当該科目については、特別な理由がある場合は対面でも可能であるが、基本はオンライン授業であり、その場合、学内 LMS を用いたオンデマンド型授業を奨励するとの連絡があった。また、通信状況が良くない学生に関しては、大学の PC 室を開放しているとも説明を受けた。そのため、音声付 PPT と書き込みができる授業資料の配信を行い、より通常の授業に近い形式を行い、学生の反応を見て、音声付ビデオ配信に移行しようかと計画をした。なお、後期は LMS で 50MB×5ファイルまで一回の講義で配信できるようになったため、20～30 分の音声付 PPT を毎回 1～2 本、学生の視聴は 25～45 分までとし、その他に毎回課した出席代わりの簡単な課題の振り返りを PDF か PPT で配信し、その中で学生からその回にあった質問で共有すべきものは解説を行った。因みに、昨年まで教室で PPT を用いた授業を行った時には、アニメーションなどを用

いたが、容量への負荷が大変大きく、今回は断念した。また、スマートフォンでの視聴も想定し、最低限 20 フォント以上で PPT は制作した。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

対面授業を前提としていたシラバスにおいては、基礎知識として、「雅楽」とは何か、その中において、「催馬楽」とはどのようなものかを丁寧に動画資料や音声資料を豊富に用いながら解説し、その歴史的な変遷も丁寧に確認した上で、現在実際に演奏されている催馬楽の映像を教室で映し出し、用いられている楽器の解説や、音声と詞章を対照しながら説明する予定であった。しかし、動画や音声に関して、オンデマンド配信では著作権の問題があり、厳しいものがあつた。PPT で検索キーワードを示し、学生自身で検索をして個人として視聴するという方法をとったが、実際には視聴せずにコメントペーパーを書いたと思しきものもあつた。また、予想していたことではあつたが、視聴しても、詞章が聞き取れないケースもあつた。従って、学生自身に「自分で催馬楽の動画を検索し、視聴した URL を貼る」という方法も考えたが、その場合全体フィードバックが煩雑になり、学生自身の理解が難しくなるのではないかという問題が起きると考えた。

また、オンデマンド授業では、積極的に課題に取り組む学生と PPT を聞き流すだけの学生による理解の差が広がったように感じた。そのギャップを埋めることが、今後の課題である。